



来り涼き時方よ飯炊き公一風興よ寝て寸陰
の間を懈怠ある事なく萬事主人の爲に忙しき
極ふ心を用て勤きり番頭杜氏外取なると屋つ
この如く逐ひ使はれりき利八自らたつて是を
我の無筆無算の故なりと奮激して手習を始免
夜とこめて出精し晝はかゝ田の手かけは見臺の如
くなる物こゝへ實語教童子教ねどの假名はま
本を米つきなう讀り酒屋の手代勤るべき
程ふはなりりして其手習入用衣類足袋など
主人より賜ふべき所を代銀より買ひ是を以て筆墨

寐

紙の値こしこれ身冬も罷衣せず足袋とえ大
節儉と盡し著る物ハ古著物にて裸の見ゆる程短
き締ぬとの強むきする所のみ着しきなり又造酒
の甚ふ心を用い物酒と造る費へ上手の杜氏と成り
一年は拾貳兩宛の給合なりし後主の利ハ勤
き利ハ勤き至る宜きつき給合を増するき由これ
を利とも利ハ對てきき勤きかな公人なれ成しけ
お精すき等の事なり給合は是迄通りよきも澤山
多ありぬ事なれ水辭退りまふなと彼見えて
増合と受りりきなり程なく是よりその代暇より

鈴木成雄

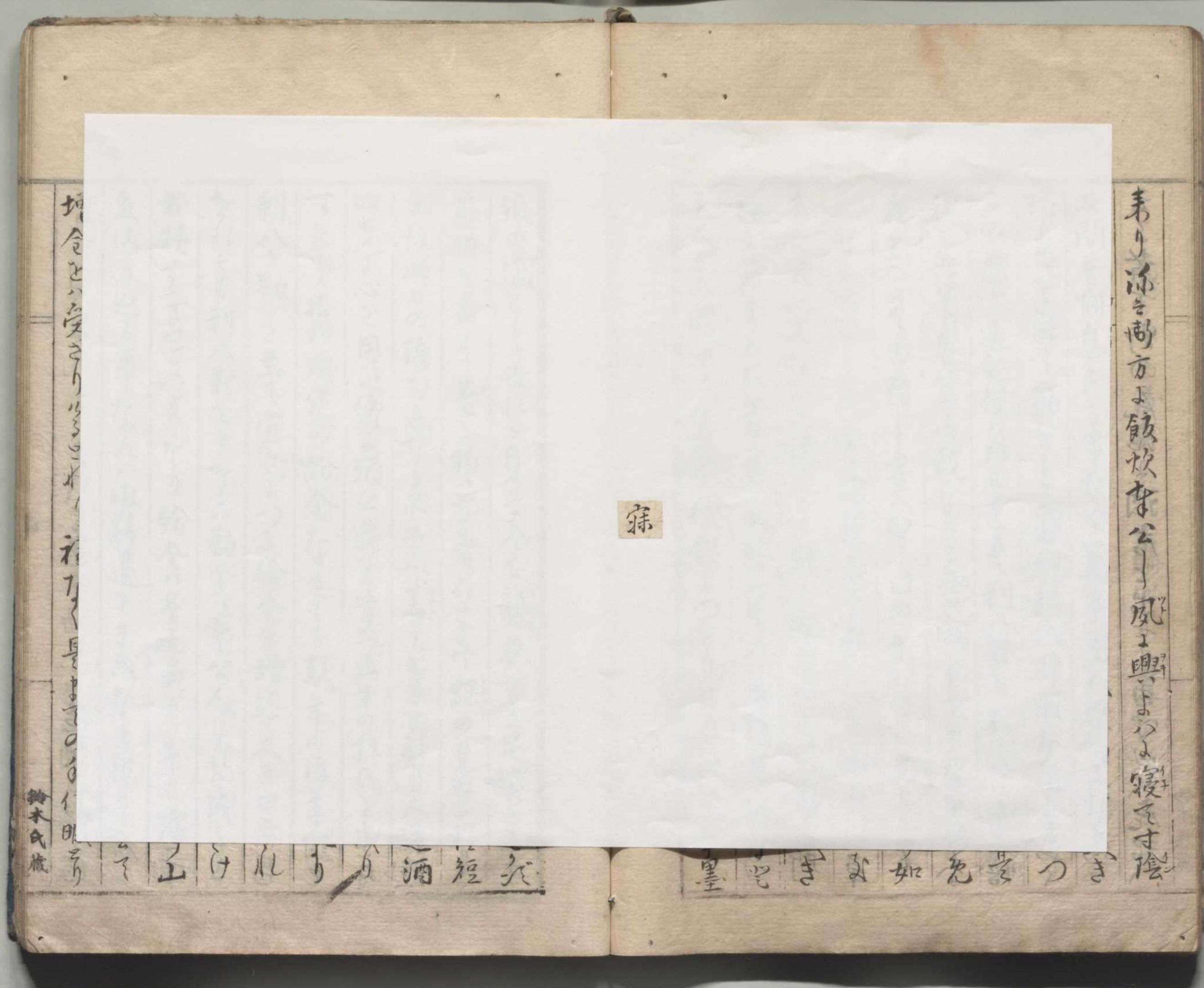
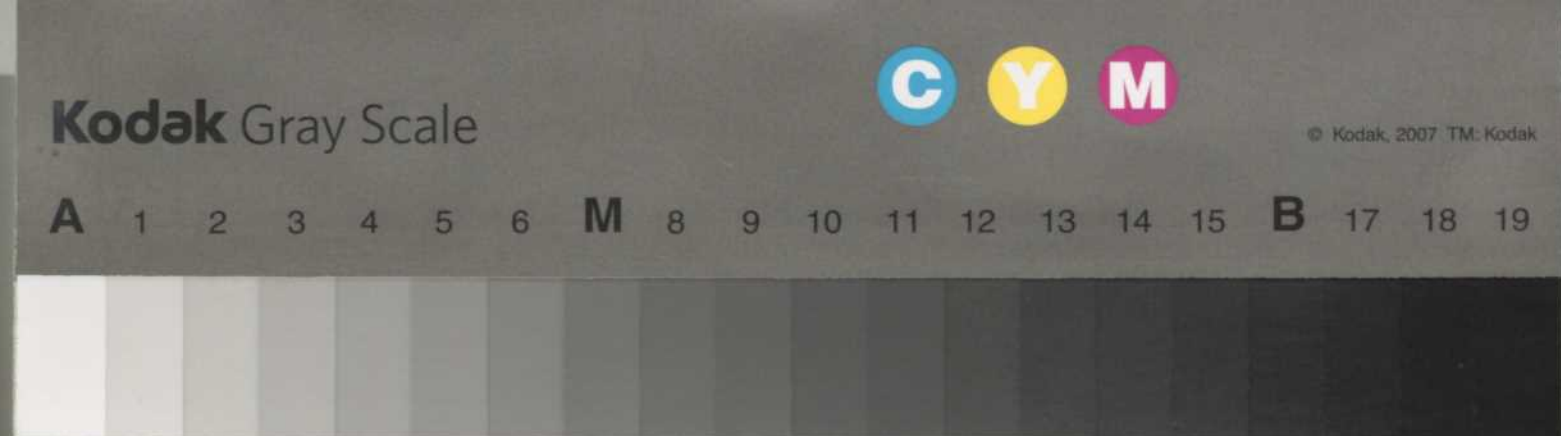




来り涼き所方よ飯炊かせし風興よ寝て寸陰
の間を懈怠する事なく萬事主人の爲に忙しき
極む心を用て勤まり番頭杜氏外取なると云つ
この如く逐ひ使はれしき利八自らおとしり見
我の無筆無算の故なりと奮激して手習を始免
夜とこめて出精し晝はかゝ日の手かけは見臺の如
くする物こゝへ實語教童子教給との假名はふ
本を米つきなり讀まり酒屋の手代勤まり
程よはなりりして其手習入用衣類足袋など
主人より賜ふとき所と代銀より見と以て筆墨

紙の値こしこれ身冬も罷衣せず足袋とる大
節儉と盡し著る物ハ古著物とて裸の見ゆる程短
き締結との強むきする所のみ着しきとあり又造酒
の古心を用い物酒と造る費へ上手の杜氏と成り
一年は拾貳兩宛の給金なりし教年の後主人より
利ハ勤まり至る宜きつき給金を増給ふき由これ
を以とも利八對てやり勤まりな公人なり成しけ
お精すべき筈の事なり給金ハ是迄通りよきも澤山
多ありぬる事なれぬ水辭退りまふなと彼見えて
増金と受たりしとこれ程なく是までの手代暇あり





寐

鈴木成雄

酒短次
り
れ
け
正
そ

墨
堂
寺
如
免
寺
つ
き
陰
寝
よ
興
風
公
飲
飯
方
湯
来





利八杜氏を子代と兼て勤る造酒のいしは
草履草鞋を作り家内の者一年中用ても猶餘り
有りて賣出すはとなりと又酒買を來る人を丁
寧にあつらへ上戸の酒を飲せ下戸の醜酒を飲せ
程ふ心はけられ酒買も多くなり高賣日増は繁昌
し又利八を公以来堅く禁酒し平生の食餌を
菜とふる下の方の者も此れともそれ食ふべき分を
貯へて酒買の酒の穀をかきり天明甲午の飢饉
よ或人草鞋の引りて贈りける利八是を飯と炊く
り主人涙を拭き壻宇壻等二口三口喰はれも咽と下す

事能はば大に迷惑しとりたになき事なり是ハ
大に與へ跡を飯と炊くき由云はれかこまりは
たとえて明後又飯と炊くき今朝は飯の如き殊
早し朝飯前一志と致すし檀那様も助なされ
ませとて真先に進で働かれ家内残す出で大に
骨が朝飯も一時もかり遅くなり利八を腰
よける時と寝い草鞋の飯と炊くき進められ
家内の者も皆大に肯しこきて食いきこけり斯
深切な公勤る事十年餘も過ぎれと給令たま
り此暇より國に歸んと思ふれ壻宇壻離縁に





きれハ暇願もなれ居る又治を樹と云る塔より此方
の世話致せし治に錢をいあき方なれ主人の身
上覺束ねしとて暇もたす居ける治も顔縁よ
なり二年程過て寛政の初も至る又新介と塔あり
て此方の世話致せし利ハこの新助と律義者より互
ねきて暇をうんと思ひたれども只承りて答ふ教とせ
てハ新助宜しからば何卒書物の端にも有事は
て教となれしと思ひ假名書もて人の教も成るき
書物なりと買調ひ草鞋作り形も讀も面白き道
理の形ハ新助も下の者も讀ゆせと上心学者流の

書物夥し買求て奉公の閑暇と窺ひ度讀ゆせ
り新助も必是こ云事ハ知されども玉極篤實なる
者となりしなり又寛政三年辛亥の冬失火有て
町内の人多く類焼したるが界屋ハ焼のこりき主
人新助大に悦び利ハ今度ハ近隣の焼合カ少
しとみせしませと云ハ新助も隨分と挨拶す利
ハ町内の人を識き文宛或ハ酒屋米形も加へ合力
せんと云れハ新助隨分と云ハ共夫程ハ及まじと
云利ハ町内近所を固極な難澁の時息どかへし
且承等平生草鞋作りしと是時此為なりとて





草鞋賣ため數十貫文是ありと帳面見せられハ
新助も利ハ取計ひは後ひきとけり利ハ嘗て國の
ほりせー母三人居りし時回國順禮ていの者給ッ
代金五分銀朱をかり物も有きと五分程もて賣拂
たき由云られ母是を買たき由云られ利ハ固極な
値のあき物買をかりて先を順禮と逐るりハ
母其値のあき目くらめて恨めしき色見られ利ハつ
りて買來るんとて走りて追つき右の拾代金五分
銀朱をりて買れ母も五分を分りて買來りし由云られハ
母大に悦しとけり去程ハ新助もまさしく篤實^{ツツミ}慎^{ツツミ}

利ハ最もやと氣はうひなりとて暇とり國り
歸り給令のたはりともて弟此家と普請^{ツツミ}土藏
と立て與へ其上先祖の代は古令三拾五餘をりて買
田地二段五六畝の取いつこ海より土藏地は成年久し
植は有もせず草木むんまけりりは利ハえよりま
りなる者なり利ハ右の土藏地と起し返さんこそ田の傍^{カキハラ}
は小屋を作り此内は寢食して日我れこの土藏地を
起し返さすんハ復家と還すとして一人して骨なり
出精せし程に成就し終上田をけりり多しとけり
其明年四月新助唐返なりて二死一生の大病のこし

鈴木成雄

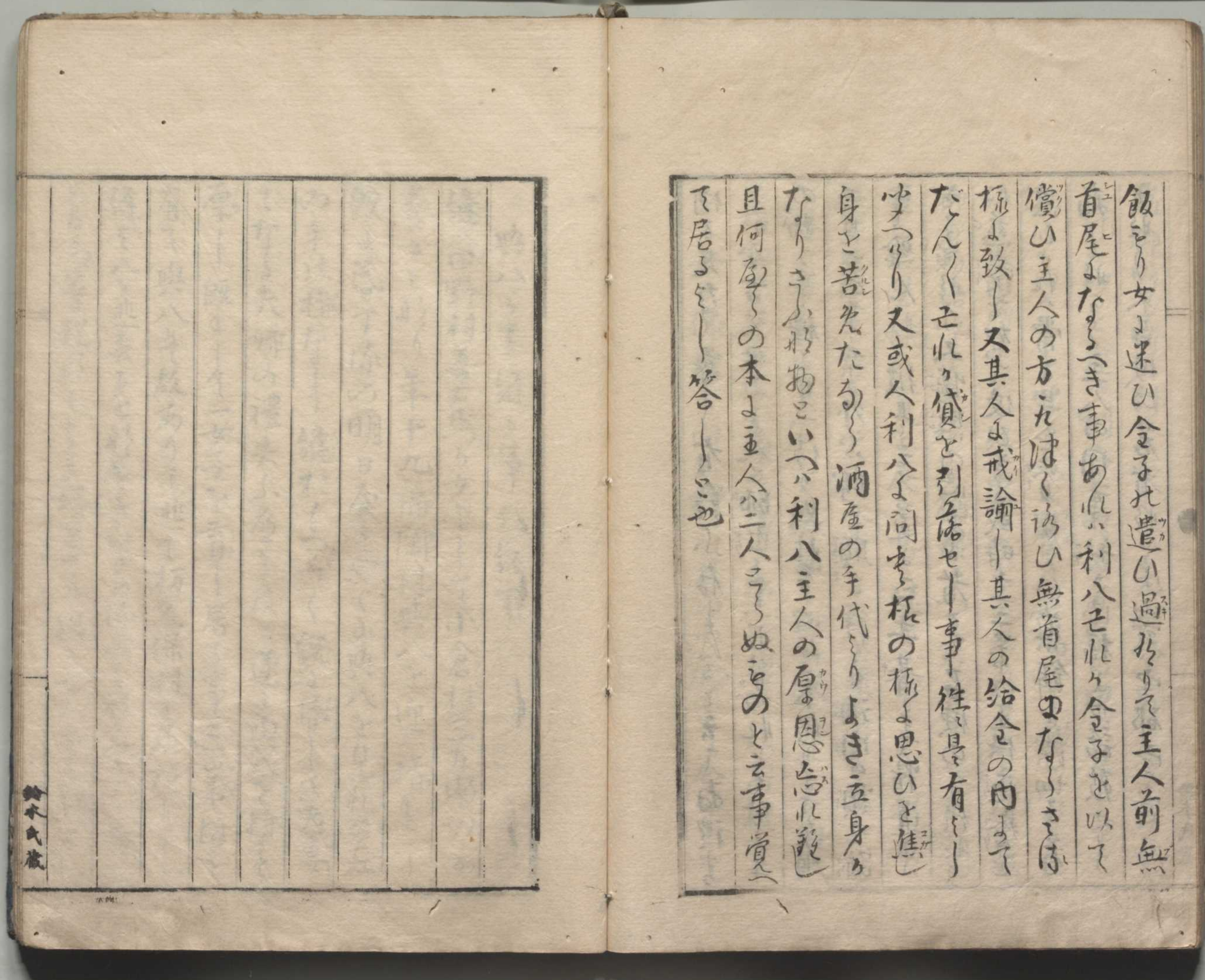
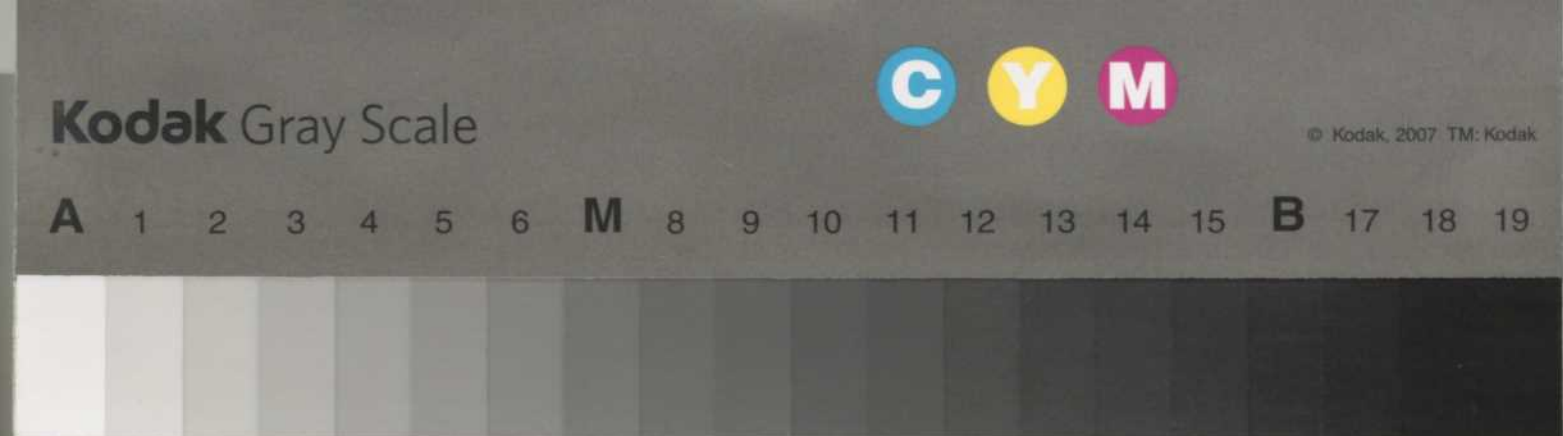




飛脚野上町に到りて先利八は知れども利八
の許に知らせた利八其時弟の家田の草とて
在りし其を以て大に驚き其場より直に家を出
て凡田の草より此度のもを野上より飛
脚の物語にて是少も猶豫すき所は非とも鹿沼と
百三十里餘の道と夜と日と継ぎ来りし利助ハ
既に死去したりと利八其を歎き悲しむ是非を
利八世上の人死せる人と佛様と喚ぶ儼然とも利八
ハ新助と死せる後も檀形様と稱し檀形様ハ山禮中
にて毎日佛壇に向ひ檀形様の形を以て今日まで

何不足なく暮し有難く存せしと云てお禮す
とか金古父母と主人の師匠と志形ハ易れども三年
の喪と勤る事禮を見へ侍然此事心學本形とて有
て見ての事や外ハ斯と顯さるれども酒肉の類を
よて喰人形と彼見云て遂に三年暮る精進し
きりし形又憐愍の心ある者其召使の子代形と
に慈愛を加へて使ひきる或時十二歳の子供痘瘡を
患ひ凡ハ常は是を養ひ負ひ藥餌を深切ま看
病し形主人の用事缺きは極よ世話致せし
と形又召使の若者形と小山或ハ宇都宮邊乃





飯より女に迷ひ金子れ遣ひ過りて主人前無
首尾なすき事あれ利ハそれれ金子を以て
償ひ主人の方えはくけい無首尾ゆなすきは
極よ致し又其人は戒諭し其人の給令の内よて
だんくそれれ貸と引落せし事往々有る
坐つり又或人利ハ同き極の極よ思ひと焦し
身と苦免たる酒座の手代よりよき立身り
なりさふ物といふ利ハ主人の厚恩忘れ難し
且何處の本よ主人ハ二人こゝぬもの云事覚
て居るし答へこ也

鈴木成雄





典ハ妻縫う事成す
逢ハ田野村喜石つり女こ小倉村三左衛門つり
養女と知り年十九福岡村典ハと迎へ婿とし
既又昏す家の明日屋やうやと典ハを見れば左
の手北指さしなす縫ぬいたもつりく既又昏こして夫妻
となる夫婦の禮失ふ處ところと遂に典ハと待まちと
厚あつ一既い一女子を育そだ居る事三さん年ねんはと
有て典ハを故ありて逃て初久保村に居たりし
縫ぬいとハ逃去ると形かたちをきいさめ心も形かたちなり養父
三左衛門等程形かたちくとき婿むこをとり得とせんかと慰なぐさめられ





とを縫又思ふ様と八の不具の人と云へとも婚姻の禮
とけし其上子も儲け後々運命のある形に
ハ他の夫と求つき道理なりといふますす鬱
樂まに居りし数日なりすて遂に逃て與ハリ
朽久保村に從ひきり其後又与ハ從て鹿沼の坂田
云所小住居せり其れも一項の宅地なりハ耕
田もなりハ是風より庸作し縫ハ夜中まで麻を
績て業ひ當りきりハ天資忤急より一日惡言
と出し縫と罵言しおもぬれて是捧薪に振
あけ出てうせいと呼ぶ事度なり縫ハ小杖を

さうけ大杖を逃す未りつて一言を反る小妻は
事なりハ與ハ怒の色定りてやう屋々を辭謝し
而して後とハ怒り解き事月小幾たいと云事哉
知るより然れどもハ腹たちの起り隣家乃
人も何故と云事と知る人なりこなりハ少き時
不敵者も宜きさる事とけし縫是を致さ
悲しきを屋々詞と温し諫めき縫ハハ形
如くの短氣者なりハ忽ち怒り發し打たきけし
て逐出きりされとも縫ハ一言の返答もせりきり
唯とハ宜きさる事の止さるて日夜愁い悲し

鈴木成雄



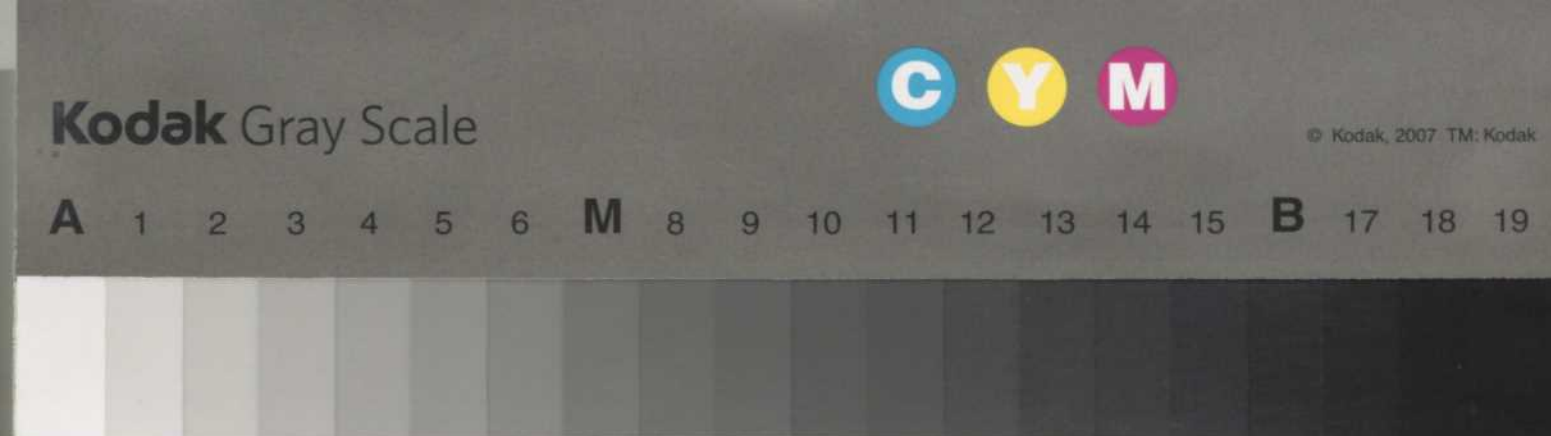


致す極き極もなしくも八つ懐の肉色あるを伺ひ他人
より其の古き物より形より漸くは諷諫しき其の
後ハ宜しくかゝる事もせざる極小なりぬるなりとハ
う前より度々怒り腹立し事も此こそ故に後ハ其
人と思ひ合せり又ハ八縫ハ斯あしきなりあるを
うねりも縫ハ夫と敬する心やとハ野屋山は行
時何程還るの遅きとも夫より先ハ食餌せざるし
とねりも其の家の家子餅のこの木より此
ある時其小兒も喰せずして夫を待しこ
り縫年二十八より一男と産後家より

貧ふしく寛政己未に至り味喰と常事十
一年と云是より其後ハ眼疾と患ひ目瞼反辟
し尋て顔面^{顔面}斜しく赤色を發し癩疾の如く
なれとも縫ハ貞節すあり固く夫ハ事ハ侍り
縫ハ母や兄形と云縫ハハをすくぬる(き曲)ハ
勸めとも縫ハハをすくさるに思ひすこやせん
かくやと思ふなり兄の方と云ハとすてぬる
さるに於て是今^今後親里にも来るすきとし
人といふ云来りぬハ縫ハ大迷惑一人といふも
辭謝しぬるも聴入りぬる終意を決し

鈴木成雄





繪本氏藏

243

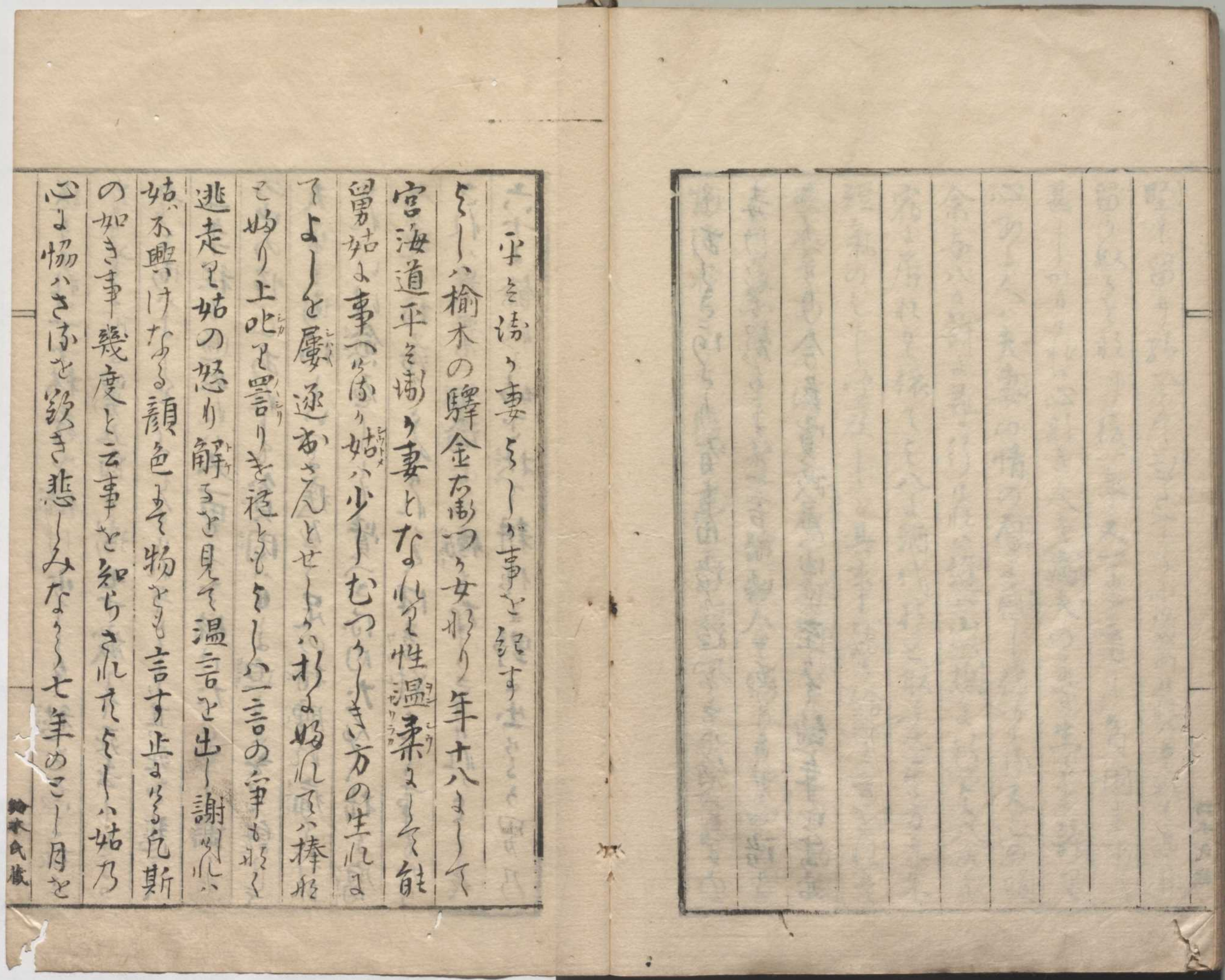


堅く留り給ふと云ふ事すゝ小爲められども是れ
留りぬるとなり後一年又一と育し貧困ます
甚しかりぬ心なり人を病夫の子を生るを諷し
心ある人ハ夫妻の情の厚き感し傳り給ふ又この頃
余与ハ許し尋ねられ山へ樵よ行くとハの
宿は居れと依ると今酒代に取らせ方元來
短氣のこし嘆及し其事語り給ふと云きは
與ハ事あるはる女房と打換りせし事お語
りり志しき有て雄山と名付けられ四方の
物語なりとて後亭主の短氣よりと云はれ

とあきなり有し由語り給ふと云ハ雄ハ事の
毒けなりと云ふ一言と與ハあきなりと云ハ
さりり今も實政度申し至り雄年四十四

鈴木成雄





平を請う妻とて事と記す
とて榆木の驛金ちあつた女なり年十八にして
宮海道平を請う妻となれ性溫柔よく能
留姑の事へあつた姑は少くむつと方の方の生れは
てよとを屢述あんとせしは姑は好れて捧
こゆり上北と云りも程とて一言の争も無く
逃走し姑の怒り解るを見て温言と出謝れ
姑不興けなる顔色も物も言す止まる凡斯
の如き事幾度と云事を知らされしは姑乃
心は協はさふを欲き悲しみなり七年のこし月を

鈴木成雄





送りし一子林を儲け少くも愁を忘る様よ
なりきる形は舅五郎を満七十歳まで死去しきり
たき焼くよといふもそれとて其死を悲みて
三年程も過ぬれハ又一男子を儲けたり是より愁
の中の懐いあれも貧困ハ日よ迫りよきて既して
夫を病に何といふ疾を足指腫れ痛て打臥
りしは愈えしとも貴へさふたんく指腐
入遂は指落ししせられは草鞋をく事もなら
されハ農業ハ勿論少の働もなかりぬとて
六十餘の姑と扶て耕作は野に出る男乃

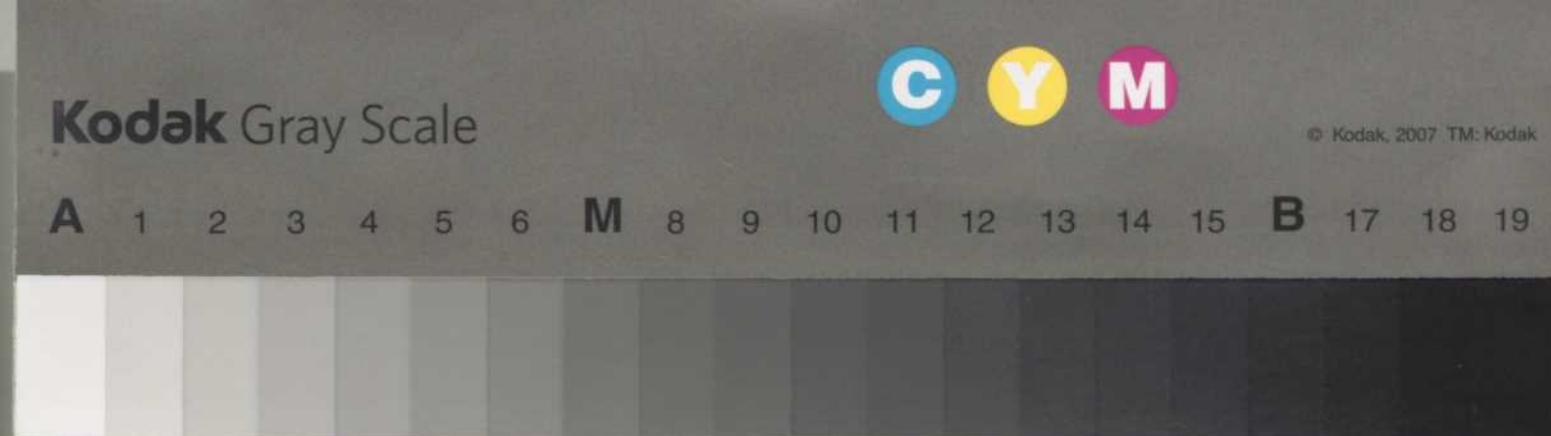
一日すは程ハ三日を四日もかりける春を六部原
に云る形は芝居有る町内男女思ひくは女
見物ハ行事形はこゝハ其側の田にあて遙小
芝居北舞臺天幕をかり形あやりて大鼓の
音耳は聴しきりしは姑の心を推かり一幕
覧たきはせせ心強き姑もいとわかれや
思ひし形は一目と透ひきりハ私さ芝居見
て居るたんく仕との手たれはなり却て後乃
難後形はなと云て母の強て推ありて獨
鋤始め耕し汗と流るる体を見て哀れ思ひぬ





人を形くも、いか、斯骨^{カキ}なり、疾^{ツク}るれとも夜々家
より病夫小藥餌を進め二人の子供はすうし置
或る阿も縁置縁なと抱ひて九の日の市毎に賣て
飯米を買事形れハ雞^{ニヘ}のち、鳴^{ナゲ}なす、も、
板形、市に出、米麥形、買、調、飯料、せ、
うす三升四升の飯米、ハ姑と夫と二人の子、せ、
を、あ、は、せ、五人の口なれ、粥^{カユ}ハ、勿論湯^{モト}は、か、て、
只、さ、り、れ、姑と云病夫と云、た、ん、こ、進、度、こ、
ろに二人の子、幾、度、も飯喰人形、む、つ、れ、
胸^{ムネ}も、さ、め、く、振、な、れ、も、さ、け、り、押、も、
只、獨、り、心、を、苦、し、む、事、傷、り、こ、云、も、な、り、
上、も、さ、り、如、く、艱、難、辛、苦、云、も、か、り、形、お、
平、も、場、弟、存、存、合、子、若、干、兩、財、布、入、母、
近、郊、り、終、る、と、在、方、一、行、り、其、夜、盜、賊、入、
君、の、金、子、残、る、す、盜、る、れ、き、れ、ハ、母、も、大、に、迷、惑、
存、存、も、君、の、金、子、を、失、ふ、て、大、に、難、儀、な、る、由、
も、母、と、存、存、と、相、談、し、平、も、場、り、所、持、の、田、地、一、反、
斗、も、金、子、拾、取、と、や、ろ、ん、の、質、地、を、相、渡、し、
平、も、場、も、命、は、形、交、の、田、を、失、ひ、ハ、大、に、な、り、
怒、り、け、れ、も、拾、取、の、金、子、形、く、取、戻、す、る、
本、氏、藏

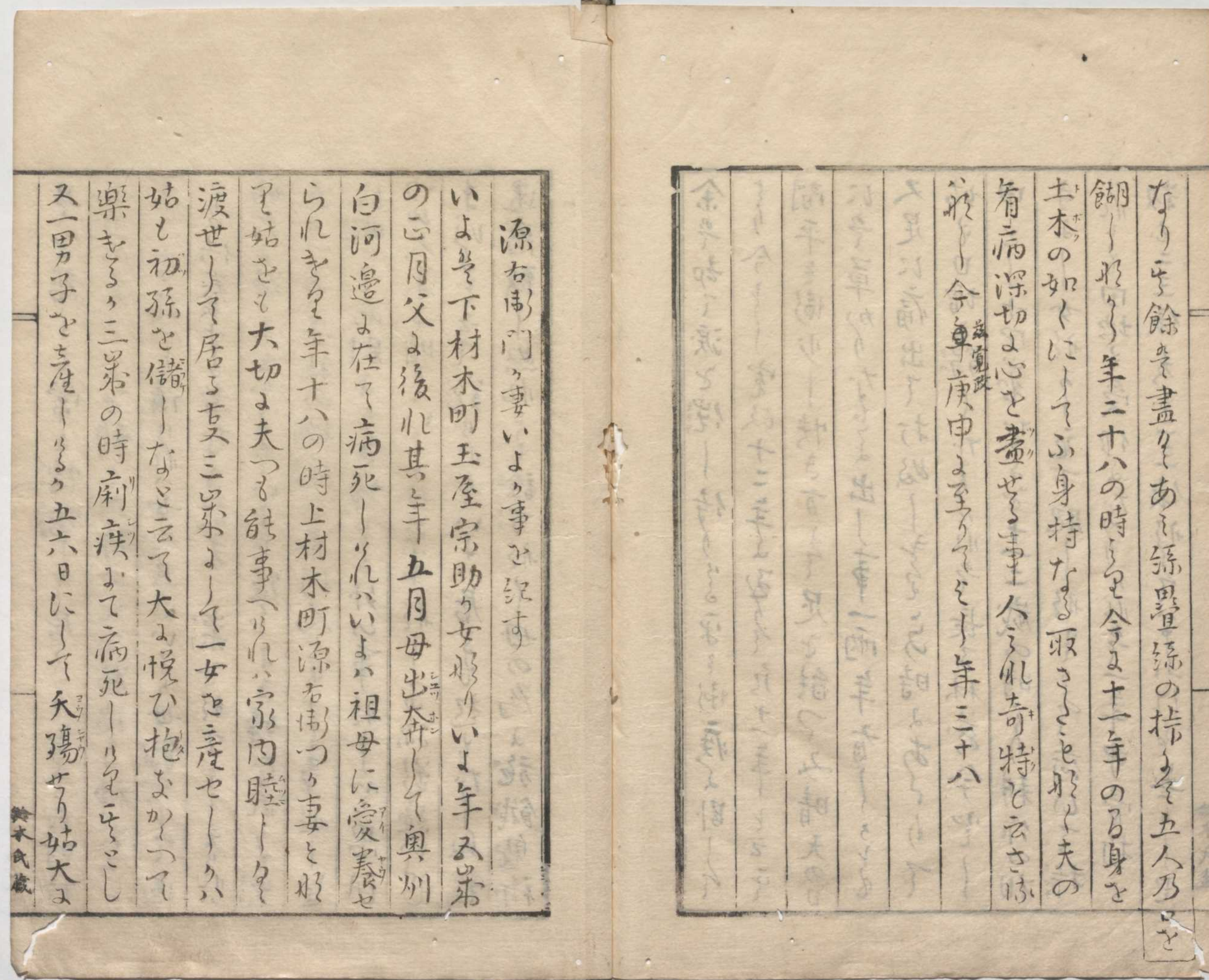


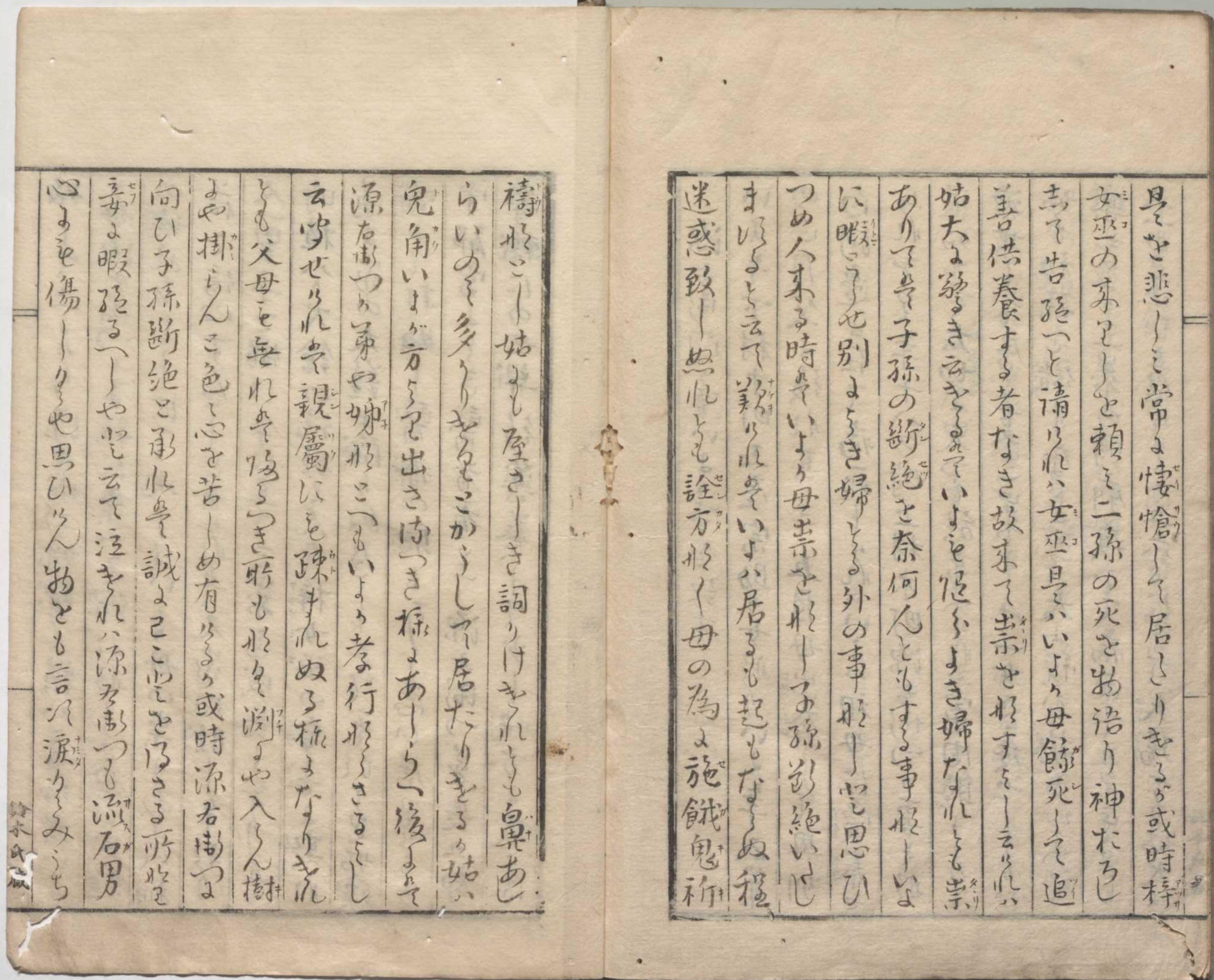


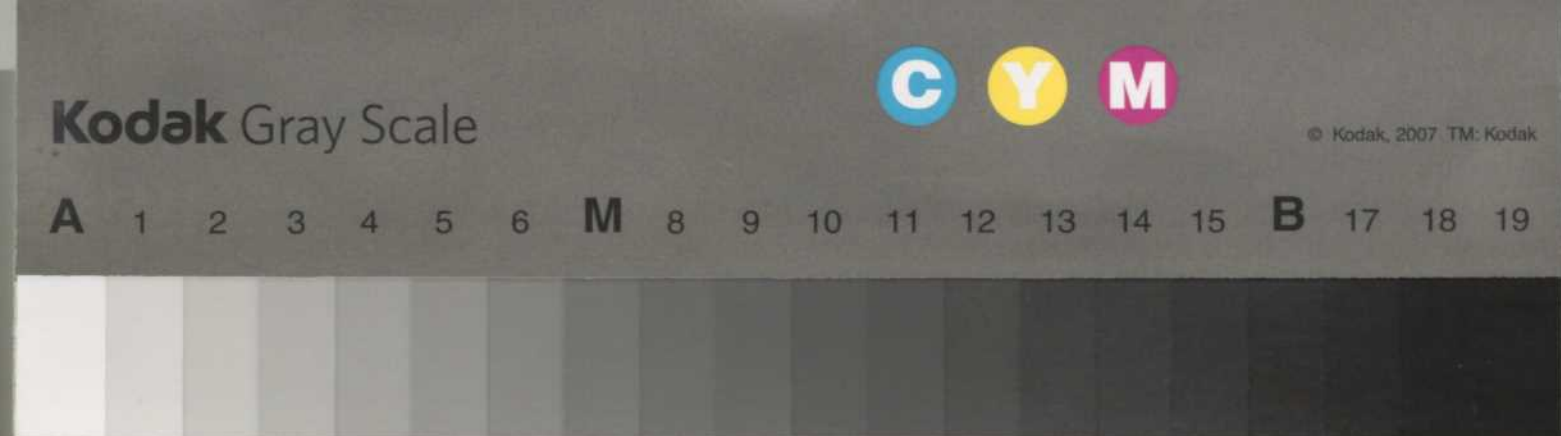
様も形く日夜愁ひ沈みし母も流石よ子れ前よ
ても大よ氣の毒になり小く形をてある程なれ
しし却て思をたまの毒と思ひ田を失ひし事とハ
恨も思ひ平を傷み向ひ田の物語ある母も大よ
たまの毒よしたまの故田の事あきめ泣き形を云て
すうし形を平を傷み田へ夫形をよ致すきれた
を負困て思をたまの毒と思ひ田を失ひし事とハ
逢ひ色くの物語ありし右の田も去年の暮に
方より金子六女金主へ返せし由に形く田地も
れ戻し返すしなれ云て悦る色あると見え
余も却て涙を催し侍りし平を病疾臥し
しり今し寛政十二年より今一年と云て
間平を病少し快き方を足と能つみ晴天の日
に草かりなれし出し事一兩年有しと云
又足に痛出て打ぬしきと云時とありて
姑も日増え弱くなり形を長子林翁今ツ
申こし十日後に十一二歳の時より耕作の相
手より女形より下肥し形をより荷ひて持
れとも田地も受作なれし形を一年中骨折ても
粗も二三俵麦も二三俵形をハすけと無しと云

鈴木氏蔵



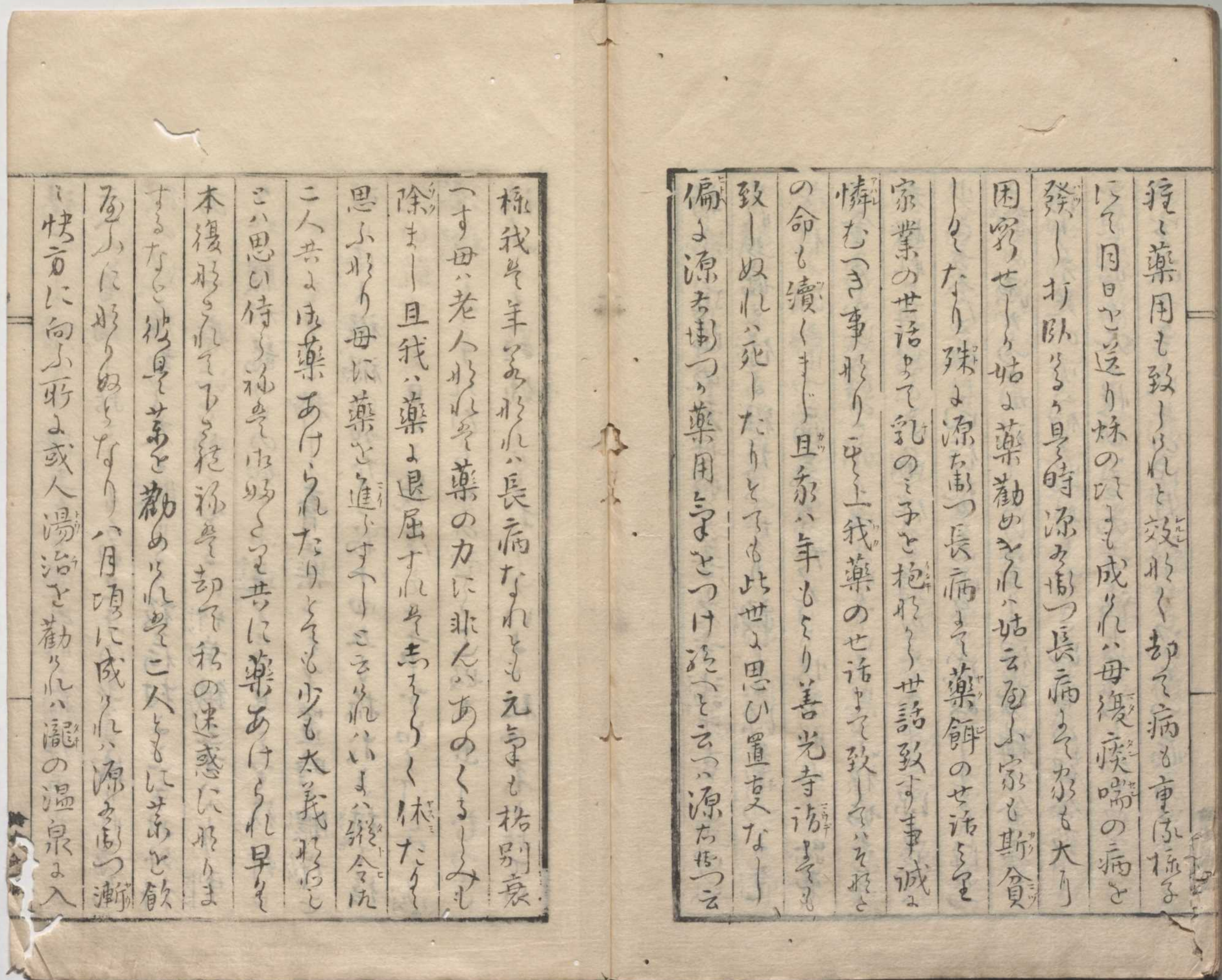


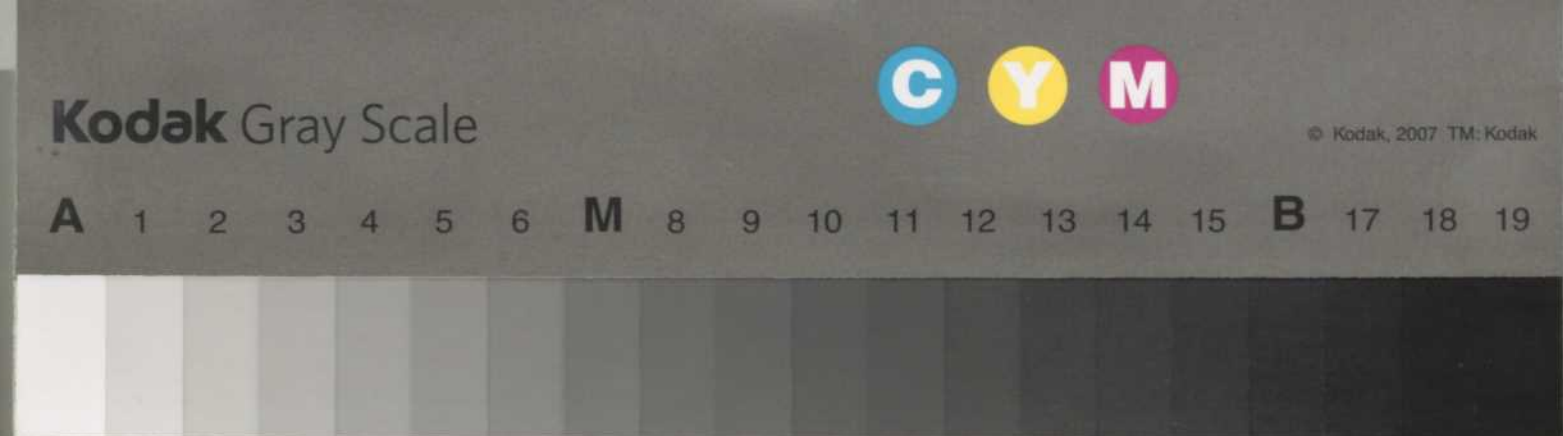




娘しき止まり源を制す嫁聲は權ハこふ者いよ
母源を制す子孫に祟つき溜れぬしこ思ひ火鎗
の姥れ云しに決していとも母の祟ある稲
荷を信心す處しと云れ又家内睦しきなり
又一男子を儲け今に至る三歳迄成長しきなり是
時權ハ火鎗の洗ぬくんを梓女巫の妄言と欺れ
遂に家の大難は陥りぬ處しさて中頃より姑疾
喘めて打ぬし醫療の驗しなく患ひ居りしより
宇都宮よりき醫者有るこそ源を制す弟長五郎
等轡にのせ昇行藥養して少く快方と成りし
折し近隣の老母は善光寺詣するこしは
りしを姑も信じて往たり頻りに源を制すを乞
ふ御ハ源を制す病氣をたんに快方形も路費
の金子よ迷惑のこし云れ思ふ振姑を年
老ぬれに再いとき道伴も得かきし源を制す
少きまなれに尚行勢余宮も成ぬしと源を
又勧め源を制すか福をうけし伊勢構の金子を
借り不足の所ハ質物もたき路費の都合致し
きれハ姑も大に悦び善光寺詣しをぬれなり又
又寛政十年戊午の正月より源を制す病をうす







湯せしり歸りて僅五六日過ぬ病疾再發し又
二人の肩痛し此ころもれ己未の春は成りぬ
股の邊痛む大腫る板倉村より上りて外科
ありて療治を頼むるに竹葉鉞三寸あり刺
りて膿水龍の口ホトシの如く小逆より見ると後針口
よりむきと揃し膏藥をむき置時と膿穢と
取りぬし襦袢の如なる物十四五も揃え拭て後
洗い乾す夏日日は幾度と云事を知らずこの膿
溼瘡より手れひら足のむきとぬき出しむつき
洗ふよも難儀しむきおしむきいよう祖母あり此てい

を見て餘り傷しと思ひ其むつきを洗んこせし
ふいよこしして水煎をもつた以形いと云て自取て
洗ひぬこしり又夜に至れば源右衛門身骨いたむ
こしにて按摩する事二病の初より死に至るまで
六百日一日の如しと云ふ又いよ母と夫と食時毎に
必何を揃進せん問ふ母は源を揃つる物喰ん
こ云源を揃つる母の何る物喰んといふすねち姑
より向いて夫を母による物より非れ喰ふよりき由り望
形よりむきと云ふ姑は赤豆の粥喰んこ云源を揃つるも
此れもむきと云時輕節入のおぢや喰んと云ふ二人の病

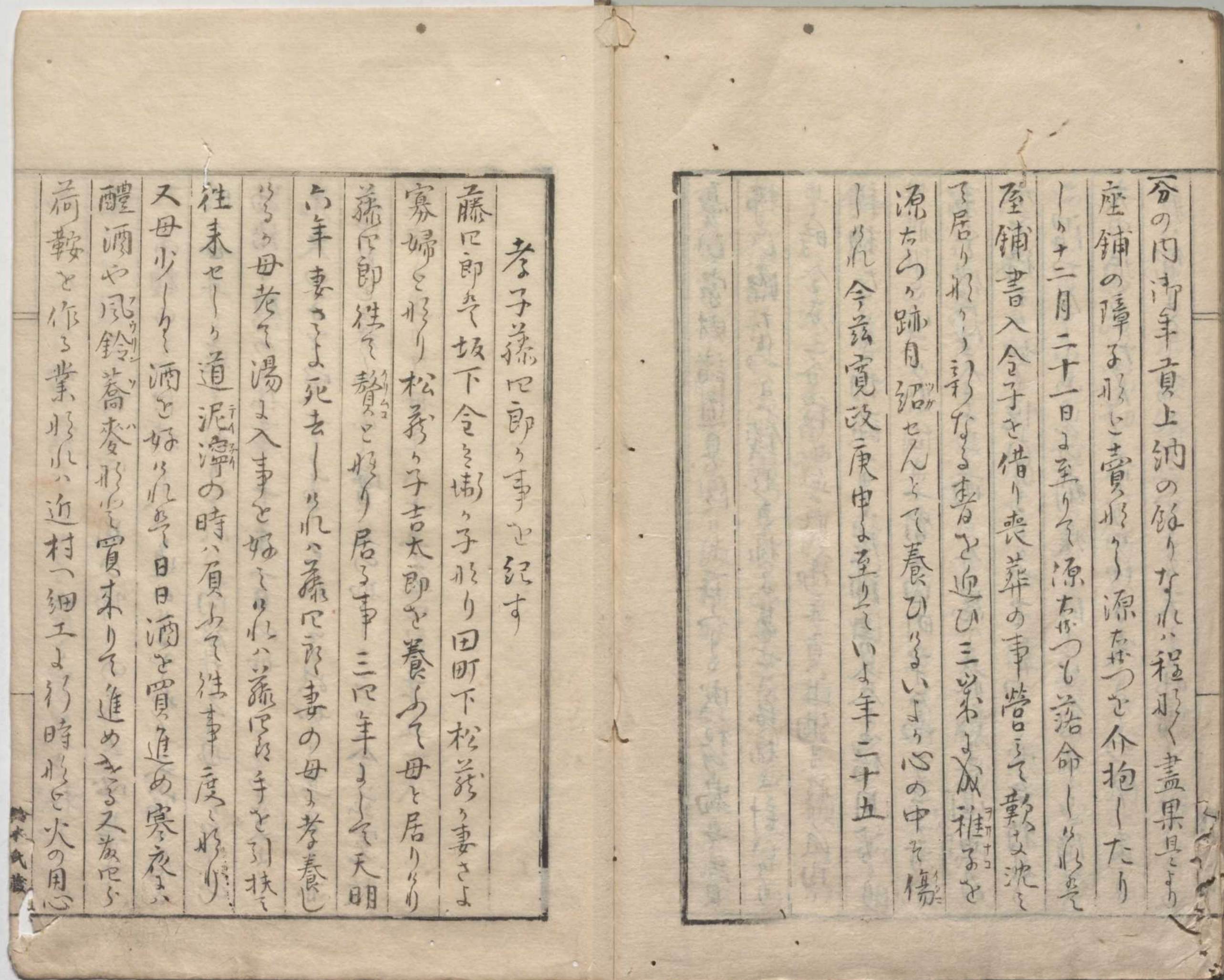
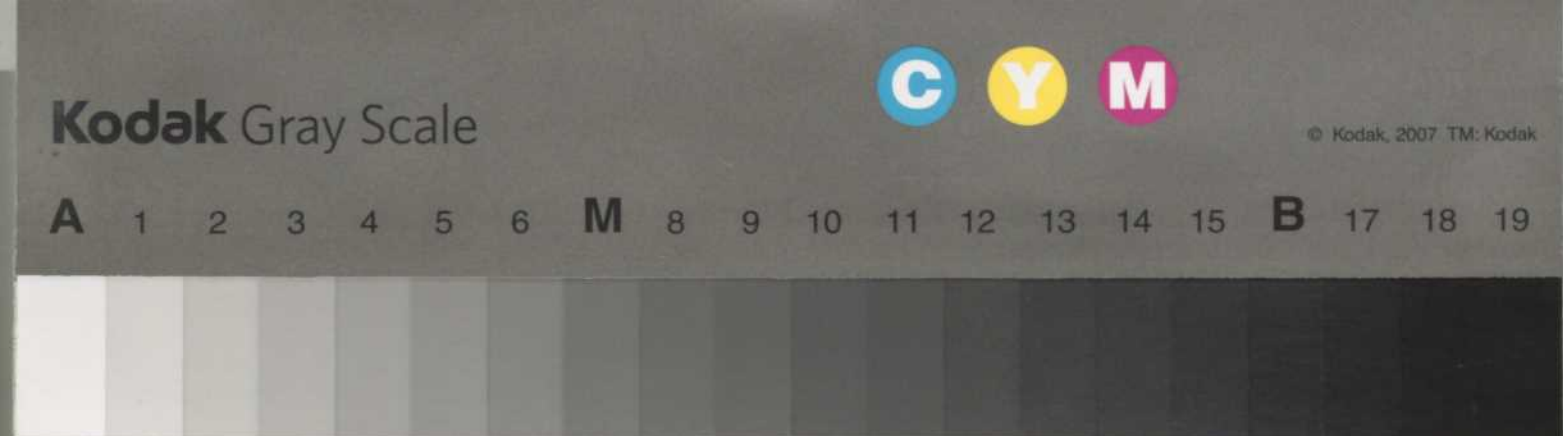


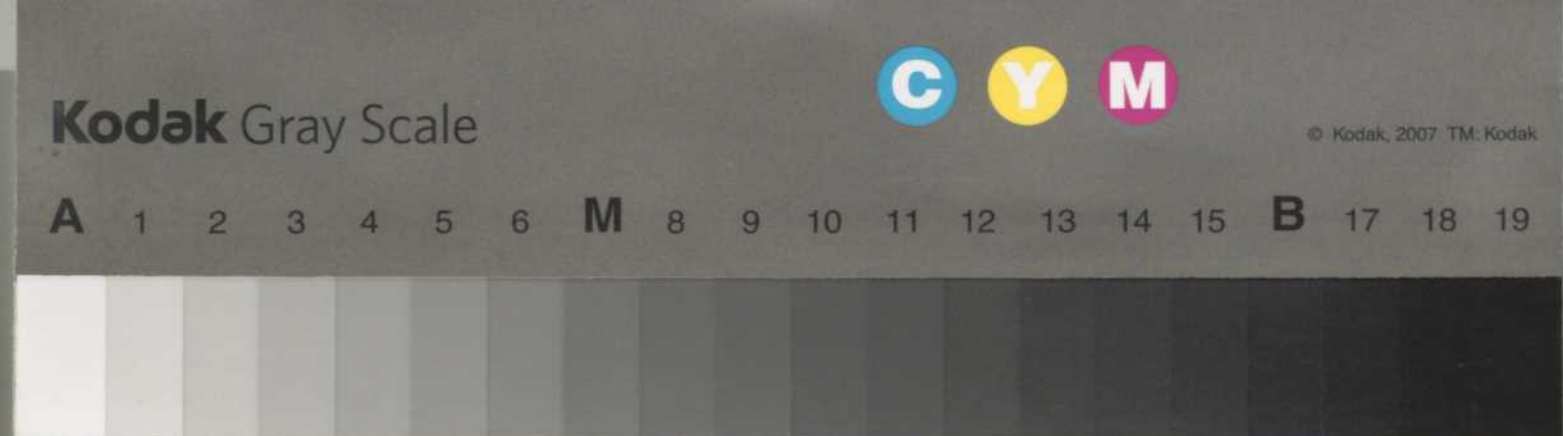


人ふ二いろ能食餌振あるをもて其願を得たりこ
すこや形涼切な菜餌致せし共老病の故や
姑八月十六日五十四歳を命終るれいふ愁
沈みぬる夫の看病せし一子僅に二歳なり
流行の痢疾を罹りれいふ夫の膿穢と痢疾
の下利の泥志はけすはるるそと薬と煎し食
餌なと進めりふ是時貧困日又窮る誠朝
あふと致す又田地も一段たりも持し共損毛乃
ある田地形れ源ち周し是れ仕事と思ひる一丁の
豆腐買ても胸も通ぬ極なりれいふ又これを

憂ひ家財諸道具はとも百人も成程の物を賣
拂い源ちつゝ六錢なり極に見せし極に計い
是時金子三分程も無れは御年貢上納もれ内
親類なとも相談せし屋浦書入金も借用する
外形しとばへれ古き一家は回町半ちつとる者此
事とばへれ金子を雨も分恵にれいふ涸魚乃
水を得る如く悦びしとやすなつと亦奇特なり
こ溜つ魚し小児の痢疾もはる平愈するも随て
夫の病またんく重なりはる寒きものり来り
花ハ質は入り綿入をえるも米も味噌も右のき



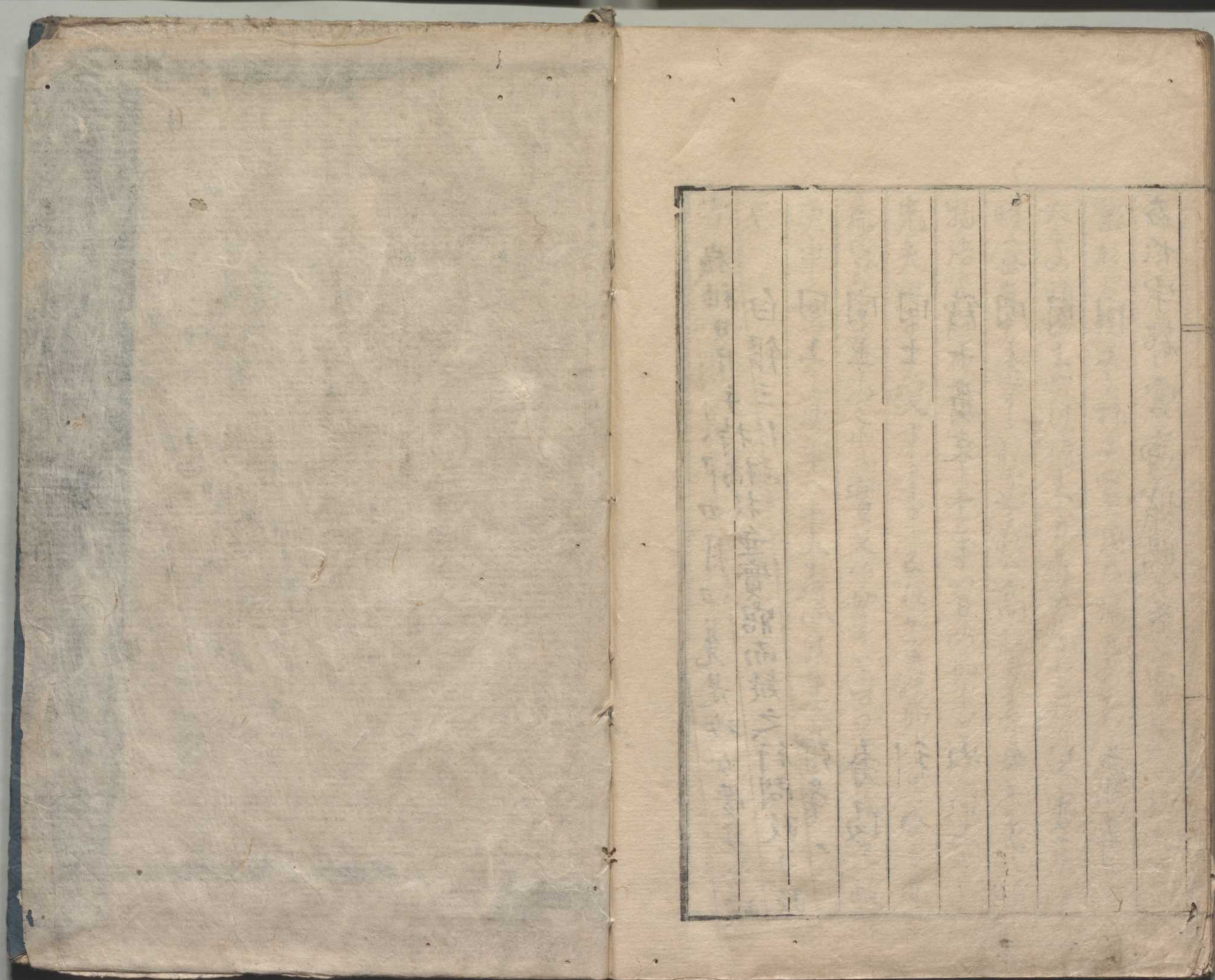




寛政十二年庚申四月四日褒賜
白銀三枚粟二俵 平彦
同上 彌曾八
同上 寿皮
同上 利ハ
同上 ぬ以
同上 一
同上 一
同上 藤四郎
右於宇都宮御城賜之

悪くんとて貧窮なれども炭を買置き枯木の
葉形や用さる様も心と用の歸りの節を必慕よく
たとの類のこやけ持来り進めざるなり又宿を居る
時ハ毎耳も遠く形も高聲をそ母とる色々の
物語り慰められ事十年一日の如くこぞ又よく
先夫の子と愛する事己れより其如く其るも亦
藤四郎と慕ふふい實父の如くこぞ今茲寛政
庚申に至りて母年ハ十五歳に計年五十八
藤四郎先夫と合ふ海に舟乗り田圃に事なり
先夫の如く其るも亦

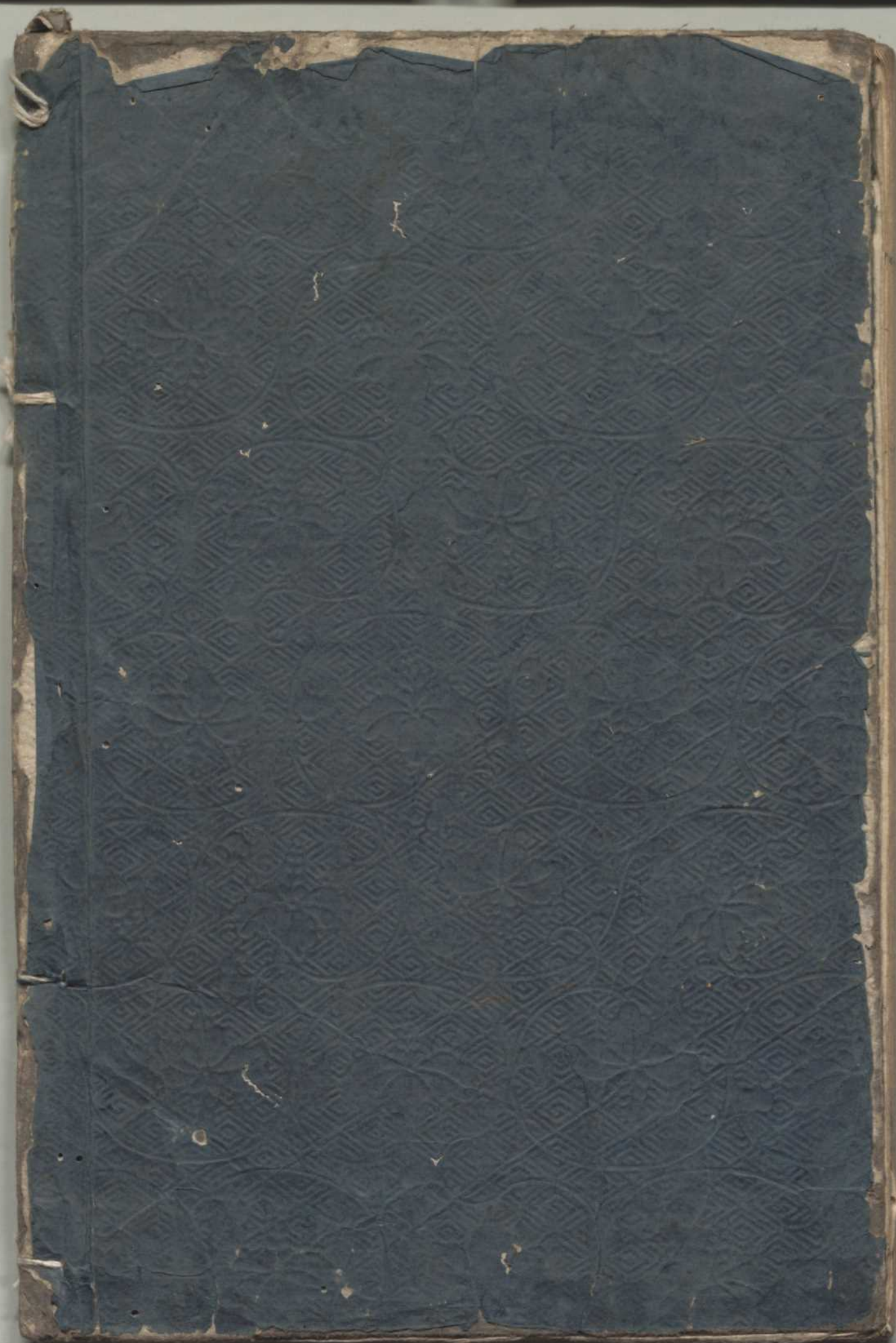




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

243





142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

243

